

「力いっぱい生きよう」

この言葉は十三年前、母が「急性リンパ性白血病」という重い病気にかかったときから母の合言葉となった。

十三年前の五月、母は急に体調を崩した。熱は四十度まで上がり、毎晩のように頭痛がして、眠れない日々が続いていた。腰が痛くて、ついには歩けなくなっていた。そして六月、母は入院してしまった。機械で測れないほど血圧は低下し、心臓は止まりかけていた。治療しなければ余命は二週間、治療しても五年生存率は三割という状態だった。私は信じられなかった。いつも笑顔で元気いっぱいだった母がこんな状態だったなんて。

そんな母を救ってくれたのが、医療保険と税金でまかなわれている「高額医療費制度」というものだった。入院する最初の一か月は数百万円という高いお金が必要になるそう。しかし、この制度のおかげで、その金額は十分の一にまで減ったという。よって、経済的な心配で治療法を選ぶ必要はなくなった。今できる最善の治療をすることができるようになったのだ。もし、この制度がなかったら、医療費の全てを払うことができず、最善の治療は受けられなかったかもしれない。このことを考えたとき、私は今まで当たり前にかかっていた税金の本当の意味、そして有り難みを改めて実感した。私が当たり前にかかっていた税金は今、どこかで誰かのためになっている。そして、誰かが払った税金が今ここで、私のためになっている。このように、みんなが払った税金はみんなの生活や命を守っていることに気付かされた。

その後、母は半年間の治療を経て退院した。その後も五年間、通院し続けて、多くの薬を飲んでいった。そして、その十三年後、またあの頃と同じようにいつも笑顔で元気いっぱいの母の姿がここにある。そして、母はこんな事を言っていた。

「病院の仲間はみんな亡くなり、なぜ自分だけ生きる道が与えられたのか。そんなことを考える時期もあった。でも、そんなこと考えたって分からない。今の自分を力いっぱい生きようと思った。きっと笑顔が幸せを呼ぶ。」母の笑顔は輝いていた。

私は将来、一生懸命働いて納税し、母が救われたように私が納めた税金によって、人々の生活や命を少しでも守れたら良いと思う。